

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593348

研究課題名(和文) 家族機能を高める妊娠期保健指導プログラムの開発に関する研究

研究課題名(英文) A study of developing an antenatal education program for fostering family function

研究代表者

神崎 光子 (KANZAKI, Mitsuko)

京都橘大学・看護学部・准教授

研究者番号：40305850

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：

家族システムの観点から母親の育児適応を促す妊娠期保健指導プログラムの開発をめざして、周産期の母親の抑うつや育児関連のストレス反応、育児自己効力感に家族の機能状態が及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。産褥期の家族機能と育児上の問題との関連、周産期の家族機能と初産婦の抑うつ状態、育児自己効力感、育児負担感との関連を検討した結果、母親の「育児困難感」は家族の「情緒的絆」「外部との関係」「コミュニケーション」機能により軽減する。また周産期の家族機能は、初産婦の抑うつ状態を軽減し、育児自己効力感を向上させ、育児負担感を軽減することが示され、家族機能を高める介入の有効性と援助の方向性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to identify the impacts of family function for mother's perinatal depression, parenting self-efficacy and parenting stress to develop an antenatal education program for fostering family function from the perspective of family system. We investigated the causal relationships between family function and parenting problems and effects of family function on depression, parenting self-efficacy and parenting burden of primiparas on perinatal period. The results showed that among the family function <affective bonding><external relationships><communication> alleviate parenting difficulty of mothers on postpartum period. Also <roles and responsibilities><affective bonding> and <external relationships> alleviate the depressive state and parenting burden, and improve the parenting self-efficacy of primiparas on perinatal period. These results suggested the validity and the direction of intervention during pregnancy for fostering family function to promote mother's mental health.

研究分野：母性看護学、助産学、家族看護学

キーワード：家族機能 母親 周産期 抑うつ状態 育児自己効力感 育児困難感 育児負担感

1. 研究開始当初の背景

女性にとって周産期は、妊娠・分娩・産褥各期の身体的変化だけでなく、心理的、社会的にも変化が著しいため、うつ病を中心とした気分障害や不安障害など精神的健康問題が出現しやすい時期である。我が国の妊娠期および産後のうつ病の発症率は5%程度と報告されている¹⁾が、妊娠期の抑うつは、産後うつ病のリスク要因であり²⁾³⁾、妊娠期から抑うつ状態を軽減することが産後うつ病予防にも重要であると考えられる。産後うつ病は、虐待行動や母子関係の障害の要因となり、子どもの心身の発達に影響することが報告されている⁴⁾⁵⁾⁶⁾。従って、周産期の母親の抑うつ状態や育児関連のストレスを予防・軽減することは、母親の精神的健康のみならず、子どもの心身の正常な発達、引いては虐待予防の観点からも重要な課題であると考えられる。

周産期の母親の精神的健康状態や育児関連のストレス反応は、家族の機能状態によって影響を受けることが示唆されている⁷⁾⁸⁾。しかし、家族機能と母親の抑うつ状態や育児関連のストレス反応、育児自己効力感との関連の詳細は明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究では、家族システムの観点から母親の育児適応を促す新たな妊娠期保健指導プログラムを開発するために、以下の3つの目的を明らかにする調査研究を行った。

(1) 産褥期の母親の育児困難感とその他の育児上の問題、家族機能との因果的関連を明らかにする

(2) 妊娠期における家族機能と初産婦の抑うつ状態、育児自己効力感の特徴とその因果関係を明らかにする

(3) 産褥期における家族機能と初産婦の抑うつ状態、育児自己効力感、育児負担感の特徴とその因果関係を明らかにする

3. 研究の方法

(1) 研究1：目的(1)を明らかにするために平成23年11月～平成24年3月に西日本に位置する分娩施設7カ所で単胎児を出産し

た産後1ヵ月の褥婦498名を対象として自記式質問紙による横断的調査を行った。調査内容は、家族機能尺度(FFS)日本語版、子ども総研式育児支援質問紙(0～11ヶ月児用)母親の年齢、夫の年齢、家族の年収、家族形態、初経産の別、出生児の体重、性別、外部からの育児サポートの有無、夫の家事育児参加への満足度であった。有効回答の得られた264名を分析の対象とした。育児背景および「育児困難感」の高低により育児上の問題の各因子得点、家族機能の各因子得点の平均値を比較した(*t*検定)。さらに「育児困難感」とその他の育児上の問題、家族機能の各因子の因果的関連を検討するために「育児困難感」を従属変数、その他の育児上の問題、および家族機能の各因子を独立変数とする重回帰分析を繰り返して因果モデルを構築し、共分散構造分析によるパス解析を行った。

(2) 研究2：目的(2)を明らかにするために関西地区の5カ所の分娩施設で初産予定の妊娠中期および妊娠後期にある女性502名を対象に自記式質問紙による横断的調査を行った。調査内容は、家族機能尺度(FFS)日本語版、抑うつ状態(菅原らのSDS簡易版)、育児自己効力感尺度(PSE)、産科学的異常、属性、年収および夫からのサポート満足度で、調査期間は平成24年11月～平成25年4月であった。有効回答の得られた310名を分析の対象とした。妊娠時期による属性の比較には、²検定を、また時期による変数の平均値の比較は、*t*検定を行った。変数間の関連は、Pearsonの積率相関係数を算出したのち探索的に重回帰分析を繰り返して変数間の因果モデルを作成し、共分散構造分析によるパス解析を行って因果的関連を検討した。

(3) 研究3：目的(3)を明らかにするために関西地区の5カ所の分娩施設で出産した初産婦231名を対象として自記式質問紙に

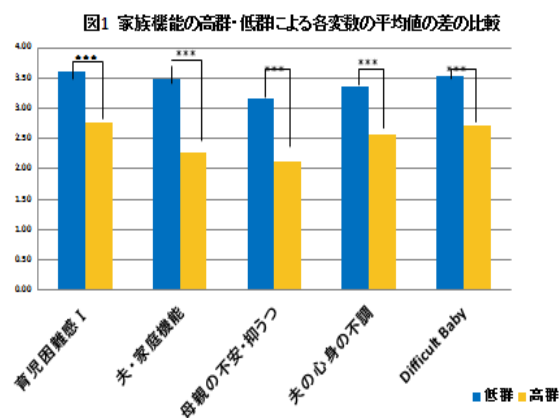
よる横断的調査を行った。調査内容は、家族機能尺度(FFS)日本語版、抑うつ尺度(菅原らのSDS簡易版)、育児負担感尺度、育児自己効力感尺度(PSE)、分娩時の異常、属性(母親の年齢、夫の年齢、家族構成、産後のサポートの有無、里帰りの有無、出産前教育への参加の有無)、年収および夫からのサポート満足度で、調査期間は平成25年1月～4月であった。有効回答の得られた132名を分析の対象とした。産褥期の家族機能、育児自己効力感、抑うつ状態の特徴を明らかにする為に研究2の妊娠中期群との間で変数を比較した(χ²検定、t検定)。変数間の関連は、Pearsonの積率相関係数を算出した。変数間の因果関係は、探索的に重回帰分析を繰り返して変数間の因果モデルを作成し、さらに共分散構造分析によるパス解析を行って因果的関連を検討した。

4. 研究成果

(1) 家族機能と育児上の問題との関連

研究1の対象者のうち、育児困難高群(ランク4および5)と判定された人は37.9%で(表1)、家族機能が低いほど育児上の問題が高く、家族機能低群は、育児困難感が有意に高いことが示された(図1)。

育児困難感I	N(%)	夫・父親・家族機能	母親の不安・抑うつ傾向	Difficult Baby	夫の心身の不調
1	12 (4.5)	2.83	2.25	2.33	2.75
2	58 (22.0)	2.45	1.88	2.40	2.50
3	94 (35.6)	2.63	2.26	3.16	2.82
4	84 (31.8)	3.24	3.18	3.49	3.23
5	16 (6.1)	3.56	3.88	3.88	3.38



また初産婦は「育児困難感」と「Difficult Baby」が有意に高く、子どもの育てにくさに関する援助ニーズが高いと考えられた。パス解析の結果から「育児困難感」は、「母親の不安・抑うつ」「Difficult Baby」によって高まり、「Difficult Baby」は「母親の不安・抑うつ」を高める要因であった。従って、子どもの訴えが分からない、泣きへの対応に苦慮する状況が母親の不安・抑うつを高め、育児困難感を高めると考えられた。しかし、家族の「情緒的絆」「外部との関係」「機能を強化することによって「母親の不安・抑うつ」「Difficult Baby」は軽減し、「コミュニケーション」「家族規範」「役割と責任」は「情緒的絆」を強化することが示され、これらの家族機能を高める援助が「母親の不安・抑うつ」「Difficult Baby」の軽減に有効であり、「育児困難感」の予防・軽減に繋がることが明らかとなった。

(2) 妊娠期における家族機能と初産婦の抑うつ状態、育児自己効力感との関連

研究2(妊娠期)の対象者のうち、軽度の抑うつを含め抑うつ状態ありと評価された妊婦は、妊娠中期では47.7%、後期では48.1%であり(表2)。

表2 妊娠期の抑うつ状態の発生率

	妊娠中期(N=151)		妊娠後期(N=159)		合計(N=310)	
	n	%	n	%	n	%
26 ≤ SDS < 32	48	31.8	55	34.8	104	33.2
32 ≤ SDS	24	15.9	21	13.3	45	14.5
合計	72	47.7	76	48.1	149	47.7

パス解析の結果から妊婦の抑うつ状態の抑制と育児自己効力感の向上には家族機能の「役割と責任」「情緒的絆」「外部との関係」が影響し、特に「役割と責任」は中核となる役割を果たす機能であることが明らかとなった(図2)。加えて「コミュニケーション」機能はこれら3つの機能を強化する重要な要因であることが明らかとなった。従って、妊娠後の早い時期からこれらの家族機能を高める方向で援助することが、妊婦の心身の変化に応じて家族がサポートシステムとして有効に機能することを可能にし、妊婦の抑うつ状態の予防・軽減と育児自己効力感の向上につながる事が明らかとなった。

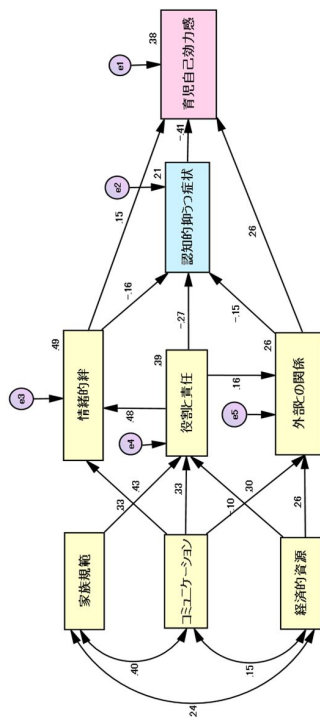


図2. 妊娠期の家族機能の抑うつ状態、育児自己効力感への影響

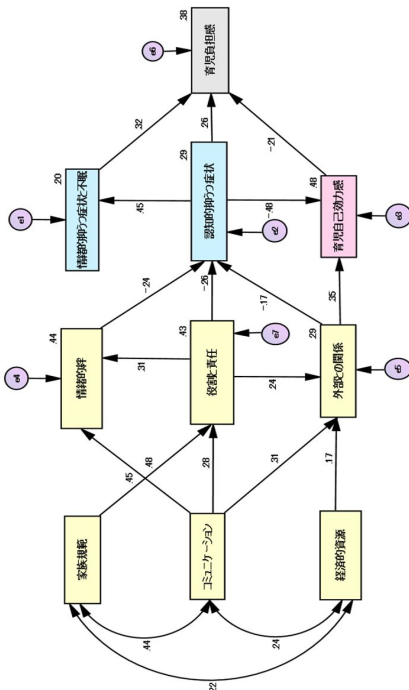
(パス解析) CMIN=10.876, df=11, p=.454, CMIN/df=.989, NFI=.989,

CFI=1.00, AIC=76.876, RMSEA=.000, 全てのパスは、5% - 0.1%水準で有意

3) 産褥期における家族機能と初産婦の抑うつ状態、育児自己効力感、育児負担感との因果関係

研究3(産褥期)の対象者のうち、抑うつ状態が疑われる母親の割合は65.4%で、その内22.6%が中程度以上の抑うつ状態を呈していた。また研究2の妊娠中期群よりも有意に抑うつ状態が高く、家族機能が低かった。対象者の63.1%が里帰りによる援助を受けていたが、育児自己効力感は比較的低いことが明らかとなった。さらにパス解析の結果から家族機能が母親の認知的抑うつ症状の軽減と育児自己効力感の向上に影響していることが明らかとなった。研究2の結果と同様に「役割と責任」「情緒的絆」「外部との関係」が重要であり、「役割と責任」は、「情緒的絆」と「外部との関係」を強め、さらに「コミュニケーション」機能はこれら3つの機能を強化する要因であることが明らかとなった(図3)。以上のことから、これらの家族機能を高めることによって産後1ヵ月の初産婦の認知的抑うつ症状は軽減し、育児自己効力感を向上させ、さらに育児負担感を軽減できることが明らかとなった。

図3 家族機能と抑うつ状態、育児自己効力感、育児負担感の因果関係(N=132)
 ※ CMIN=13.76 (df=26, p=.98), CMIN/df=.529, NFI=.97, CFI=1.000, AIC=91.76, RMSEA=.00, (p<.05).



(4) 総括

本研究により、育児関連のストレス反応である育児困難感には、母親の不安・抑うつ、子どもの育てにくさが影響し、子どもの育てにくさが母親の不安・抑うつを助長する因子であることが示された。また妊娠期には、妊婦の約5割が、また産後1ヵ月では約7割が抑うつ状態にあり、抑うつ状態が育児自己効力感を低下させ、育児負担感を高めることが明らかとなった。しかし、妊娠期から家族機能を強化することによって抑うつ状態は軽減し、育児自己効力感が高まり、産褥期の育児困難感、育児負担感の軽減に繋がることが明らかとなった。

以上の成果から家族機能を高めることによって母親の周産期の抑うつ状態や産褥期の育児関連のストレス反応の軽減が可能であることが明らかとなり、今後の保健指導において強化すべき援助の方向性が示唆された。本研究の成果に基づき、周産期の抑うつ状態を予防し、育児自己効力感を高めるために家族の機能状態を高める妊娠期保健指導

プログラムの試案を作成した。今後は、プログラムの実用化に向けて、縦断的調査によりプログラムの有効性を検討することが必要である。

<引用文献>

- 1) Kitamura T, Yoshida T, Okano K, et al. : Multicentre prospective study of perinatal depression in Japan: incidence and correlates of antenatal and postnatal depression. Arch Women's Ment Health 9, 121-130, 2006
- 2) O'Hara MW, Swain A : Rates and risk of postpartum depression: a meta-analysis. International Review of Psychiatry 8, 37-54, 1996
- 3) Beck CT : A meta-analysis of Predictor of postpartum depression. Nursing Research 45,5, 297-303, 1996
- 4) Murray L : The impact of postnatal depression on infant development.: J Child Psychol. Psychiat. 33,(3), 543-561,1992
- 5) Murray L, Hipwell A, Hooper R : The cognitive development of 5-years-old children of postnatally depressed mothers. J Child Psychol. Psychiat. 37,8,927-935, 1996
- 6) Murray L, Fiori-Cowley A, Hooper R : The impact of postnatal depression and associated adversity on early mother-infant interactions and later infant outcome. Child Development, 67, 2512-2526, 1996
- 7) Wada N : A study of the relationship between the problems of 3-year-old children and the family function. J Japanese Society of Child Health 59,1,25-34, 2000 (in Japanese)
- 8) Yamakawa N, Koike H, Ohtani N, et al. : Mission in sukuSuku cohort, Mie: A study focusing on the characteristics of participants and the mental health of the mothers raising children. J Epidemiol 20, Suppl 2, s413-s418, 2002

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

Mitsuko Kanzaki, Chieko Fujiwara,
Effects of family function on antenatal depression and parenting self-efficacy of Japanese primiparas in the second and third trimesters of pregnancy, Journal of Japanese Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology, (査読有), Vol.20, No.2 November 2015.
(掲載決定)

神崎光子 産後1ヵ月の母親の育児困難感とその他の育児上の問題、家族機能との因果的関連, 女性心身医学(査読有)第19巻(2), 2014, 176-188.

[学会発表](計 3 件)

Mitsuko Kanzaki, Causal relationships between Parenting Self Efficacy, Depression and Family function of Expectant Mother in Japan
1st International Congress of the International College of Person-Centered Medicine, 9.November, 2013, Zagreb, Croatia.

Mitsuko Kanzaki, Mother's childrearing problems at 1st month on postpartum associated with family function and family characteristics in Japan.17th International Congress of the International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology, 22-25. May, 2013, Berlin, Germany.

神崎光子, 竹明美, 前田一枝, 産後1ヵ月の母親の家族機能評価と育児困難感との関連, 第32回看護科学学会, 2012年12月1日, 東京国際フォーラム(東京都千代田区).

6. 研究組織

(1)研究代表者

神崎光子(KANZAKI, Mitsuko)
京都橘大学・看護学部・准教授
研究者番号: 40305850

(2)連携研究者

遠藤俊子(ENDO, Toshiko)
京都橘大学・看護学部・教授
研究者番号: 0023299

大滝千文(OTAKI, Chifumi)
元京都橘大学・看護学部・助教
研究者番号: 50454476
(平成25年度より研究協力者)

竹明美(TAKE, Akemi)
京都橘大学・看護学部・専任講師
研究者番号: 30344568

田邊美智子(TANABE, Michiko)
元京都橘大学・看護学部・教授
研究者番号: 80227199
(平成26年度より研究協力者)

前田一枝(MAEDA, Kazue)
元山梨大学・大学院医学工学総合研究部・助教
研究者番号: 80460690
(平成26年度より研究協力者)

前原澄子(MAEHARA, Sumiko)
京都橘大学・名誉教授
研究者番号: 80009612